

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

20 世紀を代表する玩具である「バービー人形」が、なぜそれほどまでに長寿性を保ち得るのか、その理由について、創造性育成を主とした「教育的意義」という側面から、バービー発売時から現在に至るまでのバービープレイを経時的に特定し、プレイヤーが生涯学習の観点において習得した学びをハワード・ガードナーの MI 理論により分析検討している点が、本研究の独創性・新規性であると言える。ただ、このテーマは独創的である一方で、MI 理論という限定的な枠組みを創造性育成の指標として与えたことによって、MI の 8 つの知能の獲得にのみ議論が終始し、創造性のもつ更なる幅への言及が弱かった点もみられ、その点は今後の研究課題とされた。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本研究は文献研究及び複数の人々へのインタビューを基軸として進められている。コロナ禍故にインタビューに関しては石渡氏の当初の計画通りには進められなかったようであるが、それでも論に説得力を与える程度にはそれらは充実したものであると見受けられた。文献研究の方法においても、英語文献のみならずパリの装飾美術館で開催されたバービー展のフランス語版図録も活用しており、外国語文献を網羅的に調査している点においても、その方法は当該分野において極めて妥当なものといえる。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

(2) にも記したように、文献資料については、石渡氏はハワード・ガードナー本人と直接やり取りをし、本人から MI 理論による分析の方法について更なる理解を得たり、また内外を問わずバービー・プレイの経験者に聞き取り調査を多数行う等、研究を進めるにあたっての基礎的研究資料やデータはある程度充実したものであった（ただしコロナ禍で本人が策定した程にはデータは集められなかったようである）。分析においては、創造的知能獲得の分析方法が、あくまで「観察」を旨としている点、これはガードナー自身がそれを推奨しているとのことであり基本的には適切ではある、が、やはり「観察」による分析に加えて、量的な分析も含めて複合的に今後進めていく必要がある点が指摘された。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

バービーの創造性育成のための教育的意義を、個人のバービー・プレイから創造性の涵養を MI 理論を基に分析するミクロ的視点からの分析、同時にそうした個が社会に対してどのような創造的意味を与えてきたのか（社会的意義）というマクロ的視点からの分析、これら両視点の分析を順を追って進めており、個と社会の両方にとって創造性育成の教育的意義がバービーには強く存するという結論を導き出している。この点は極めて妥当な論考であり結論であると言え、一定の学術的水準に達していると判断された。

（５）取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

（１）から（４）までの記述を総合して、本論文は学位取得にふさわしい意義や成果が十分に認められるものであると審査者一同判断した。

--

